

## 平成13年度コロキウム発表要旨

平成13年度第1回7月11日

演題：スポーツと心の発達

演者：竹之内隆志（体育科学部）

筆者は、平成12年3月より平成13年3月までの約1年間、文部科学省の在外研究員としてカナダのオタワ大学へと渡航する機会を得た。今回のコロキウムでは、その間の活動報告を含め、これまで筆者が行ってきたスポーツ経験とパーソナリティ発達についての研究を報告した。

スポーツ経験がパーソナリティ発達に及ぼす影響を検討するうえでの第一の問題は、どのようなパーソナリティ変数を取りあげるのかである。従来の研究の多くは、16人格因子質問紙（16PF）、ミネソタ多面人格目録（MMPI）、Eysenck Personality Questionnaire（EPQ）などの特性論に基づいたテストを用いてパーソナリティを測定してきた。しかし、このような特性論に基づいたテストで測定されるパーソナリティ変数は、環境よりも遺伝によって規定されるといわれており、変容が期待されにくい。そこで本研究では、発達の変容が確認されており、またスポーツ経験によって変容が期待されるパーソナリティ変数として自我発達に着目した。

第二の問題は、スポーツ経験の質をどのように概念化するのかである。従来の研究の多くは、スポーツ選手と非スポーツ選手のパーソナリティの違い、あるいは種目や競技レベルによるパーソナリティの違いを検討するにとどまり、スポーツ経験の質を表層的にしかとらえていない。本研究では、スポーツ選手が競技生活や日常生活で経験すると考えられるいくつかの事象を想定し、それらの事象における、危機（迷いや悩みの程度）、探求（迷いや悩みの解決に向けた努力の程度）、自己投入（自己の決定に対する努力の程度）の経験を問うことによって経験の質を測定した。

対象者は中学ならびに高校スポーツ選手782名で、スポーツ領域や日常生活領域における10の事象での危機、探求、自己投入の経験が調査された。自我発達の程度は文章完成テストによって測定された。個々の事象における危機・探求・自己投入の経験と自我発達の関係を分析した結果、危機・探求・自己投入の経験が自我発達に影響を及ぼす事象には年齢差があることが明らかにされた。つまり、中学生ではチームメイトとの関係が自我発達に影響を及ぼし、この影響は高校生でもみられるが、加えて高校生では指導者との関係が

自我発達に影響を及ぼしていた。また、高校生においてのみ職業や進路が自我発達に影響を及ぼしていた。こうした年齢差は、中学スポーツ選手と高校スポーツ選手の心理的離乳や同一性形成の過程の差異を反映していると考えられた。自我発達に影響を及ぼす事象には性差があることも明らかにされた。つまり、男子では中学生においても高校生においても競技成績が自我発達に影響を及ぼしていたが、女子ではこうした影響はみられなかった。このような性差は、男子スポーツ選手と女子スポーツ選手の性役割の内面化の差異を反映していると考えられた。さらに、男子においても女子においても、スポーツ領域での事象の少なくとも一つの事象は自我発達に影響を及ぼしていた。したがって、中高期でのスポーツ経験は、男子スポーツ選手においても女子スポーツ選手においても自我発達に影響を及ぼすと考えられた。

得られた結果をまとめるならば、中高期ではスポーツ選手が取り組むべき固有な発達課題がスポーツ領域や日常生活領域において存在し、個々の発達課題に対して、危機、探求、自己投入を経験しながらスポーツ選手の自我発達が進むといえる。心理的離乳や性役割の内面化といった課題は、スポーツ選手のみに限定された課題ではない。しかし本研究の結果は、スポーツ選手はこれらの課題をスポーツ経験の中で達成していくことを示唆しており、スポーツ選手のパーソナリティ発達における特徴的な点と考えられる。